

平成26年度 安曇野検定準備講座

～未来につなぐふるさと安曇野講座～

～第4回講義～

安曇野の近代化遺産に歴史を探る



日輪舎（国登録有形文化財）

とき：平成26年10月23日（木）午後7時～8時30分

場所：穂高交流学習センター「みらい」

講師：高原正文氏

講師プロフィール

高原 正文 氏 (たかはら まさふみ)

郷土史家。信濃史学会理事。

1952年(昭和27年) 安曇野市豊科新田出身。現住所は豊科成相見岳町。

1979年(昭和54年) 豊科町に博物館学芸員として採用され、長らく豊科町郷土博物館等の学芸員を務め(専門:民俗学、美術史)、「日本名刀展」「地籍図展」「南安曇の道祖神展」などの特別企画展を次々に企画・開催した。

1992年(平成4年) 豊科町誌編纂委員に委嘱され『豊科町誌』の執筆、編集に携わる。

2000年(平成12年)10月 第51回地方史研究協議会(松本大会)で「安曇平における生活環境と在郷町の変貌-安曇郡内〈小都市〉競争の背景-」を研究発表。

2003年(平成15年)4月から1年間、豊科町郷土博物館の館長を務める。

2010年(平成22年) 信濃史学会定期総会で「安曇野市中心市街地の近代史」を研究発表。

2013年(平成25年)3月 総務部特命課長を最後に、安曇野市役所を定年退職し、以後郷土史研究に専念。直近の論文に「平成の大合併における市制要件緩和と都市像の変容」(平成26年8月『信濃』第66巻第8号掲載)がある。

著書『安曇野史への招待』(信毎書籍出版センター) (単著)

『長野県民の戦後六〇年史』(信毎書籍出版センター) (共著)

『生活環境の歴史的変遷』(雄山閣) (共著)

『豊科町誌 近現代編』(豊科町誌刊行会) (共著) ほか

I 近代化遺産とは何か

1. 近代化遺産の本来の定義

◎「**近代化を担った各種の建造物や工作物を意味し土木・交通・産業遺産の三種類がある。**

これには施設に係る設備・機械・家具・備品類や機関車・車両・自動車なども含まれ、従来の指定物件と違って、**単体としてではなく、システム保存**するのが、大きな特徴になっている。近代化を担った施設を、備品類や機械器具など広範囲に保存し、システムが稼働していたときの状況をできるだけ生き生きと再現させようとしている」（伊東孝『日本の近代化遺産 ―新しい文化財と地域の活性化―』）

2. 近代化遺産と文化財指定・登録

◎「**<近代化遺産>は、1993年(平成5)、重要文化財にあらたにもうけられた種別で、これによって近代の土木施設や産業施設が国の重要文化財に指定される道がはじめてひらかれたのである**(近代化遺産の調査自体は、1990年に開始されている)」(同前)

◎国登録有形文化財→文化財保護の緩やかな制度。平成8年文化財保護法改正、登録制度。

II 安曇野市内の近代化遺産

1. 「市民タイムス」の連載「近代化遺産を歩く」で採り上げられた遺産 17件 (掲載順)

名称(掲載名称)	建築(建設)年代	所在地	文化財指定	講座対象
日輪兵舎 ※1	昭和20年(1945)建設	堀金烏川 倉田	国登録有形文化財	○
礫山館	昭和32年(1957)建設	穂高 等々力町区	国登録有形文化財	○
旧篠ノ井線廃線敷	明治30年代前半建設	明科東川手 潮～潮沢	—	○
旧鐘の鳴る丘高原寮	昭和21年(1946)改築	穂高有明 古厩	市有形文化財	○
務台酒造の蔵	大正6年(1917)建築	三郷温 野沢	—	○
宮城第一発電所	明治37年(1904)建設	穂高有明 宮城	—	○
新屋公民館	昭和26年(1951)建設	穂高有明 新屋	国登録有形文化財	○
旧東洋紡豊科工場	昭和14年(1939)竣工	豊科 新田・成相	—	○
相馬家の洋館	明治22年(1889)建築	穂高 白金	—	○
旧信濃教育会館	昭和4年(1929)建設	豊科高家下飯田	国登録有形文化財	○
三沢屋菓子店	大正末期の建築	穂高 穂高町区	—	○
旧豊科座	昭和初期の建設	豊科 成相	—	○
ワシントン靴店有明工場	昭和20年(1945)稼働	穂高有明 富田	—	—
法蔵寺庫裏	明治45年(1912)移築	豊科 新田	国登録有形文化財	○
旧街道の町屋 ※2	明治初期建築	穂高 等々力町区	—	○
中房温泉温泉大プール	大正12年(1923)建設	穂高有明	国登録有形文化財	—
常盤橋	昭和36年(1961)建設	穂高 等々力町区	—	—

(註)※1 「日輪兵舎」は『南農 五十年の歩み』には出てこない名称で「日輪舎」が正式名称である。

※2 具体的には古川荘一氏邸。

2.「市民タイムス」掲載以外で採り上げておくべき遺産又は遺構 8件 (北から順)

名称	建築(建設)年代	所在地	文化財指定	講座対象
旧木戸橋遺構	1930年(昭和5)建設	明科東川手木戸	—	○
犀川発電所	1923年(大正12)建設	明科中川手町	—	○
旧若松屋醤油店	幕末	穂高等々力町区	—	○
小川写真館	1924年(大正13)建築	穂高穂高町区	—	○
旧田沢橋	1955年(昭和30)建設	豊科田沢徳治郎	—	○
旧市川歯科医院	1919年(大正8)頃建築	豊科新田	—	○
拾ヶ堰サイフォン(旧)	1920年(大正9)竣工	豊科高家飯田	—	○
飯田家住宅	江戸～昭和初期	豊科高家飯田	国登録有形文化財	○

Ⅲ近代化遺産に歴史を探る (地域別)

1.明科市街地の近郊～郊外 【明科地域】

(1)旧木戸橋遺構



旧木戸橋遺構(犀川右岸側) 犀川左岸側の遺構から対岸を望む 犀川線起工記念碑(昭和3年)

①篠ノ井線開通後の犀川通船

□天保3年(1832)～明治35年(1902)は、犀川通船が松本白板～東川手木戸～新町の間を往来し人と物資輸送の大動脈であった。

□明治35年(1902)に篠ノ井線が開通して、鉄道が人・物資輸送の主流になると松本白板・東川手木戸間の犀川通船はなくなる。しかし鉄道の恩恵を被らない東川手木戸・新町間には犀川通船が残る。主な船着き場として木戸より南に熊倉、押野があったほか北では上生坂、大日向、野平、川口などにもあった。大正中頃には木戸に㊦藤原運送店ができ木戸・新町間の物資輸送を行う。木戸橋が完成した昭和5年(1930)同店は物資輸送の主軸をトラックに変え、社名を犀川線通船自動車有限会社に変更。通船は次第に下火になっていく。

②犀川線開通と木戸橋設置

□昭和3年(1928)12月15日に東川手村木戸を起点として新町経由で長野市に至る幹線道路「犀川線」の起工式と、木戸の渡しに替わる木戸橋の起工式を行う(鍬入れは長野県知事千葉了)。木戸橋は昭和5年7月に渡り初めと完成の祝賀会が行われる。

□木戸橋⇒全長116m、幅5.5m、三連のアーチ橋。

□昭和13年(1938)に犀川線が長野市まで全通。木戸橋の通行量が増していく。物資輸送の通船はほぼ終焉を迎える。

③新木戸橋設置と旧木戸橋の廃止

□昭和 48 年(1973)4 月新しい木戸橋の開通式。新橋は全長 192m、幅は車道 7m、歩道 2m。道路も付け替えられ旧橋は役割を終えた(歩行者用の橋にもならない)。

(2)旧篠ノ井線廃線敷

①篠ノ井線開通の経緯

□篠ノ井線未開通時の上京の方法 安曇野地域から東京へ鉄道で行くには、徒歩で保福



廃線敷(潮沢付近)



レンガを使った漆久保トンネル



廃線敷(潮沢付近)

寺峠を越え上田に到り、上田駅から鉄道に乗るしかなかった。

□篠ノ井線は 6 ルート考えられた。明治 29 年(1896)10 月上旬篠ノ井側から着工。明治 33 年(1900)11 月 1 日西条まで竣工。明治 35 年(1902)6 月 15 日西条・松本間開通。同年 12 月 15 日松本・塩尻間開通により完成。

□明治 29 年の駅誘致運動⇒東川手村村長隠岐吉枝らが連名で逓信大臣に稟申書を上げる。それにより西条・松本間では東川手村潮と上川手村田沢に駅誘致の運動がなされたが、予定の潮神明宮前は一等の田地が広がるため地元の反対があり、駅としても篠ノ井方面からは下り勾配で蒸気機関車はブレーキを掛けざるえず、現在の明科駅の場所へと変更。倉科多策らが潮の駅予定地に打たれた仮杭を抜いて明科へ打ち直したともいう。

②篠ノ井線明科駅開業の効果

□篠ノ井線明科駅開業により駅前集落が発達。

□大正 4 年信濃鉄道の穂高駅開業まで穂高地域から全国各地への人の移動や物資輸送にとって明科駅は今日では考えられないほど重要な役割を占めた。これ無くして明治 37 年(1904)の宮城発電所開設はありえない。

③明治 35 年の明科・西条駅間のルートが廃線となった理由

□施設の老朽化、潮沢信号機のスイッチバック、急勾配、単線状態などが支障。新線は複線化をめざし昭和 49 年(1974)12 月着工。昭和 63 年(1988)9 月新線に切り替わる。しかし未だ西条・明科間は単線のまま。新線の篠ノ井・塩尻間は 66.7km で旧線の 67.9km より 1.2km 短縮となっている。

④廃線敷払い下げと整備

□平成 6 年(1994)廃線敷は JR から明科町へ払い下げられ、潮沢住民の希望で「けやきの森公園」としてマレットゴルフ場などに整備。ある会社では旧第二白坂トンネルの一部を同町から借りキノコ栽培も行った(「広報あかしな」NO.360<平成 14 年 6 月>による)。

□平成 18 年地元有志でボランティア組織「ケヤきの森」が結成され、「ケヤきの森」は荒廃が進んでいた廃線敷の約 6km のコースを下草刈りや鉄道防備林のケヤキの間伐などをしてトレッキングコースに整備。

□平成 20 年度から 3 年間の潮沢廃線敷整備事業(総務省の「地域活性化・きめ細かな臨時交付金」と県の「合併特例交付金」を活用)により観光資源としてのトレッキングコースが本格的に整備され、特に平成 21 年 4 月に漆久保トンネルの扉を撤去・開放したことでトンネル通行可となり観光客数を飛躍的に伸ばした。

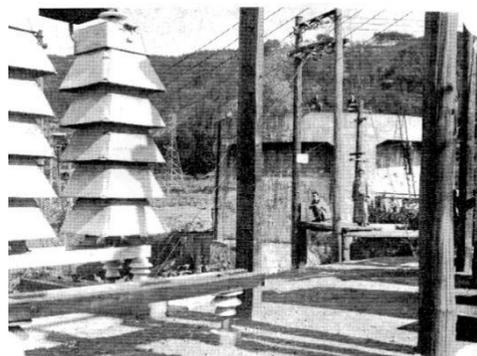
⑤近代化遺産としての漆久保トンネルと三五山トンネル

□総レンガ造り漆久保トンネルと三五山トンネルは市内で数少ない明治期の産業遺産。

(3)犀川発電所



犀川発電所



犀川発電所 (出典: 信州電気記念写真帳)

昭和 12 年頃の犀川発電所

(「安曇野に電気が灯って 100 年」より)

①犀川発電所の経緯

□大正 12 年(1923)3 月、中川手村字矢渕 3013、3014 番地に竣工。上掲写真 2 枚のうち左に写る貯水槽は今も稼働開始当時の姿をとどめる。右にも同じ貯水槽が見えている。

□「犀川発電所は、犀川の光地区から取水して、水路長 1,919 間(3,489m)、うち隧道こう長 218.2 間(396m)の長い水路により、高瀬川、犀川出合い下流の中川手地区に発電所を建設した。この地帯一帯は水田が広がっており、発電所の建設計画時には、当然のことながら地元関係者との間で、**水利について利害関係が生じるため覚書を締結**している。この覚書により、発電所用水路からは、車屋せぎ、前川せぎ、西せぎなど 10 箇所以上の用水が分岐して、光、御宝田一帯をかんがいしている。 / この犀川水路末端の水槽からは、大正 15 年に建設された明科火力発電所の冷却水も取水されることとなった」(『安曇野に電灯が灯って 100 年』より)

□「犀川発電所は、運転開始当時、11kV で系統に接続されていたが、大正 13 年 9 月に安曇電気の送電線幹線が 44 kV に昇圧されたため、犀川発電所も 44 kV 昇圧用変圧器が設置された。現在の 77 kV に昇圧されるのは昭和 45 年 7 月のことである。」(同上)

2.穂高市街地 【穂高地域】

(1)碓山館(碓山美術館の本館) 国登録有形文化財

①碓山館建設着工までの経緯

□大正 4 年(1915)相馬愛蔵・黒光夫妻らの計らいで荻原碓山の作品・資料が生家へ送られ、次兄荻原十重十が母屋の南に建てた平屋に収められ、碓山館とした。

□昭和 12 年南安曇教育会会長小松進が美術館設立のため荻原家と交渉したが不調。

□昭和 25 年(1950)穂高町長宇留賀嘉惣治が町立碓山美術館の設立を目指すが挫折。



礫山館



北壁のアーチと十字架を刻むタイル

- 昭和 28 年南安曇教育会が礫山研究委員会を発足させ、東京芸大笹村草家人を指導者に迎え、研究、顕彰、作品保全の 3 つを目標とする。同年、穂高町が礫山顕彰会を組織する。
- 昭和 29 年信大教育学部に「坑夫」のブロンズが設置され、穂高町外三ヶ村組合立中学校の玄関前にも設置。同年、相馬黒光の好意で「女」がブロンズ化され南安曇教育会が所蔵。
- 昭和 30 年(1955)南安曇教育会は礫山研究委員会を礫山保存会に変更する。保存会は礫山の全彫刻ブロンズ化。ブロンズ化はワシントン製靴会社社長東条たかしの寄付金 50 万円により可能となり、鑄造は鑄金家山本安曇の高弟伊藤忠雄が手がける。
- 昭和 31 年財団法人礫山館建設準備委員会が組織される。その中の常任委員会により美術館建設の具体計画を練る。
- 昭和 32 年礫山館建設準備委員会を礫山美術館設立委員会に変え、設立の趣意書と建設基金の募集計画の作成を行う。募金目標は 700 万円。

②礫山館建設

- 寄付金と補助金(県・町)の総額 837 万円(昭和 32 年度末現在)
- 寄付者総数 **29 万 9100 余名**
- 設計者 早稲田大学工学部建築科主任教授 今井兼次
- 設計方針 a. **礫山の精神的な支えとなったキリスト教の表示** b. **明治時代の作品を収納するにふさわしい明治時代の建築様式** c. **信州特有の厳しい気象に耐える構造**
- 美術館建設地 穂高中学校南東隅と決まり穂高町は校地 200 坪を無償提供。その東へ私有地 165 坪を買い足し、建設地としている。
- 建設 昭和 32 年 7 月着工 同年 10 月末竣工
- 全作品・資料の寄付契約 昭和 32 年 12 月所有者荻原家と礫山美術館設立委員会が契約。
- 礫山美術館開館 昭和 33 年 4 月 22 日(礫山第 49 回忌)。同年 7 月法人登記完了。

(2)古川荘一邸 (旧街道の町屋)

①建物の概要

□木造二階、切妻平入の土蔵造。平側 1 階の壁の腰下はなまこ壁とする。店舗または住宅の機能を優先した「見世蔵」である。平側 2 階部分を黒漆喰の壁とした。屋根中央部に越屋根(煙出し)を置く。主屋の奥に土蔵を配置。

②歴史的景観を形成する建物（穂高町並の伝統的建物群の特徴と土蔵造）

□文化庁文化財部『中央日本塩の道地域連携整備計画調査 文化調査報告書・別冊 歴史的町並み・集落等の調査(分布調査)編』（平成 13 年）の「長野県穂高町穂高」によれば「伝統



蔵造りの古川荘一邸



主屋の奥に土蔵が配置されている

的な町屋は切妻造、棧瓦葺あるいは鉄板葺(もと板葺)、二階建ての建物で、正面に下屋を付けている。また**宿の北端付近には、土蔵造の町屋が数棟ある**。 / 切妻造の形式の町屋で、幕末のものは、表側の中二階の軒が低く、その下に連続した格子窓がついている。 / 間取りは、通り土間の下手に一系列にシモミセ・物置が並び、上手に 2 列に居室が並ぶ形式が多く、中央部分を吹き抜けとしている。 / 主屋の背後には、数棟の土蔵が並ぶ町屋が多い。土蔵は、屋根を置屋根形式にしたものが多いが、軒を塗籠にした土蔵も見られる。腰下や柱を海鼠壁にした土蔵もある」。古川荘一邸はそうした歴史的伝統建築の一つだが**古民家再生**の工事を施し、現代の穂高町通りにごく自然に溶け込んでおり、町並みに重厚な風情をもたらしている。

(3)旧若松屋醤油店（旧街道の町屋）

①建物の概要

□木造二階、切妻平入の土蔵造。1 階平側の壁の腰下はなまこ壁とする。店舗または住宅の機能を優先した「見世蔵」である。平側 2 階部分を黒漆喰の壁とした。両開きの扉の「召し合わせ」（二つの扉を閉じた際の接合部分）は閉じれば機密性に優れる。現況は屋根中央部に越屋根(煙出し)が見られない。

②歴史的景観を形成する建物

□古川荘一邸と同様、文化庁文化財部『中央日本塩の道地域連携整備計画調査 文化調査報告書・別冊 歴史的町並み・集落等の調査(分布調査)編』（平成 13 年）の「長野県穂高町穂高」によれば「**宿の北端付近には、土蔵造の町屋が数棟ある**。 / (中略) / 間取りは、通り土間の下手に一系列にシモミセ・物置が並び、上手に 2 列に居室が並ぶ形式が多く、中央部分を吹き抜けとしている。 / 主屋の背後には、数棟の土蔵が並ぶ町屋が多い。土蔵は、屋根を置屋根形式にしたものが多いが、軒を塗籠にした土蔵も見られる。腰下や柱を海



旧若松屋醤油店（平成 25 年 9 月 25 日撮影）



旧若松屋醤油店（平成 26 年 10 月 7 日撮影）

〔現在は安曇野バザール若松屋として営業〕

鼠壁にした土蔵もある」。旧若松屋醤油店もそうした歴史的伝統建築の一つである。かつて主屋の裏手に土蔵を五つほど構えていたといわれる。この建物から**明治期に南安曇最大の商業地であった穂高の賑わい**が彷彿とされる。『信濃不二』（昭和 7 年 11 月発行号）所載の会田血涙「勝野先生と私」によれば明治 35 年以前の穂高の繁栄について「当時は中央線の開通しない時で新町から犀川を通船で塩石油や肴や総ての貨物を等々力万水川へ荷上げする時で等々力佐蔵サの所が舟着問屋で、此処から毎日数十台の運送荷車で物資を穂高町に送り共栄社や角吉等へ配給したもので、**当時の穂高町は南安随一の都**で新田（豊科町のこと）あたりから不幸や婚礼の買物には是非穂高町へ来たもので実に殷賑を極めたものであった」とある。

③旧若松屋醤油店と松沢求策

□自由民権運動家松沢求策(1855～1887)の生家として知られる。

□松沢求策は「中農」の出身とされ、農業と醤油屋を営む家を生家としているが、「中農」でもこれだけの規模の店構えの「見世蔵」と奥に土蔵 5 つという姿は、いかに近世安曇郡の中核穂高といえども「農」階層の平均的な姿ではない。「近世の後期になると加速する農民の階層分化に乗じて保高町村（隣接の等々力町村とで保高宿形成）の庄屋小川家等の土地集積とそれに伴う富蓄財を元手とした商業面での台頭が顕著になる」（熊井保「近世後期における農村金融-信濃安曇郡保高町村小川家の場合-」〈津田秀夫編『解体期の農村社会と支配』所収〉参照）ことの事例に松沢家も加えていいとすれば、「中農」でも限りなく「上農」（豪農）に近く「中農の上層」といえたのではなかろうか。

④大正期の若松屋の繁栄ぶり

□『穂高町誌』歴史編下の大正期の穂高町商業の項には「穂高町で醤油の製造・販売を商う松沢醤油店は、養老、松白、並と三種類をそろえて客の注文に応じ、お客は「久●」の印の一升どっくり持参で店頭で購入した。隣り近所の得意先には小学校を出たばかりの店員が配達にまわり、他に五、六人の住み込みの店員を抱えていた。正月は一日、二日と休み、明けて三日店員は初荷を荷車やリヤカーで得意先に届けて、商売繁盛を願ったものだった。大正十三年の醤油売上帳によると、最高は十二月の五十七石五斗九升四合、最低は二月の二十九石三斗五升五合で年間四百八十四石六斗一升一合の多きにのぼっている」とある。

(4)小川写真館



穂高神社門前の大門通りにある小川写真館



大正13年写真館建築の様子（小川写真館提供）

①小川写真館と大門通り

□穂高神社門前の大門通りという写真館にとっては好条件な立地。

②大正モダニズムの雰囲気漂う建物

□大正12年(1923)の関東大震災では首都東京および横浜市の木造家屋のかなりの数が倒壊か焼失となった。首都復興ではレンガ造からコンクリート製への転換が目立った。大正13年という建築年から小川写真館ではその教訓を踏まえ、外壁を燃えにくく堅牢なコンクリート造としたものであろうか。右の写真には写真館の横に一般の民家が見えるが、比較するまでもなく**耐震性、耐火性**において小川写真館の方が優れていることは一目了然である。**平成26年で築90年**。大正モダニズムへのこだわりが分かる建物。

□1階右手の模擬ペディメントは上の工事写真にも見えているが、真ん中にカメラのシャッターの絞りをあしらひ、一目で写真店と分かる工夫がされている。西歐的感性。

□1階店舗、2階写真撮影スタジオ→2階スタジオ北側には採光のため特別にドイツ製のガラス板がはめ込まれていた。現在は撤去。

(5)三沢屋菓子店



銘菓「礫山最中」の看板を掲げる三沢屋菓子店



穂高市街地の本通りに映える外観

①三沢屋菓子店

□創業 明治19年(1886)

□最盛期 明治から大正にかけて従業員数は十数人にもなる。篠ノ井線開通後、物資輸送と人の往来が増えると三沢屋菓子店の前から松本方面行のトテ馬車が出るようになる。明科方面へは丸山菓子舗前から馬車が出ていた。大正 4 年の信濃鉄道穂高駅開業はこの町の商業に裨益するところ大となった。

□店舗建て替え 大正末頃建て替えたといわれる。店舗は関東大震災を教訓として、すぐには倒壊しない堅牢な**鉄筋コンクリート造**としたようである。

□経済統制と戦後の混乱期 親戚の食堂を手伝い、戦後松本の縄手での食堂経営で凌ぐ。

□戦後の営業再開 昭和 25 年

②銘菓「碌山最中」

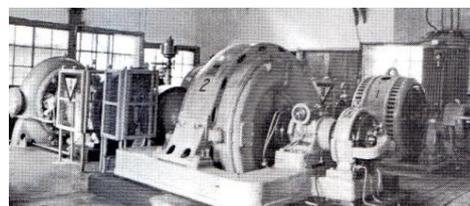
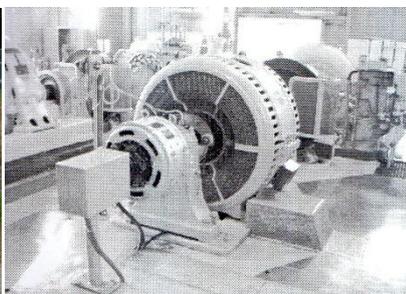
□碌山美術館開館前の昭和 30 年頃、地元出身の偉大な彫刻家荻原碌山を多くの人に知ってもらおうと「**碌山最中**」を売り出した。**発売が碌山美術館建設前で大変意味を持つ。**

3.穂高市街地の郊外 【穂高地域】

(1)宮城第一発電所

①宮城第一発電所建設

□明治 36 年(1903)安曇電気株式会社(社長:横澤本衛. 本社:大町)により明治 36 年起工し明治 37 年に完成。発電所に設置するドイツ製の水車や発電機は横浜港から荷揚げされると、陸路鉄道で篠ノ井線明科駅まで運ばれ(明治 26 年に全通した信越線経由)、明科からは舟積みされ犀川から穂高川を上流に向かい、有明で陸揚げされた後、荷馬車で発電所建設現場に運搬された。**発電所に据えられたフォイト社製の水車とシーメンス・シュケルト社製の発電機はともに製造年が 1903 年で、いまだ現役である。**

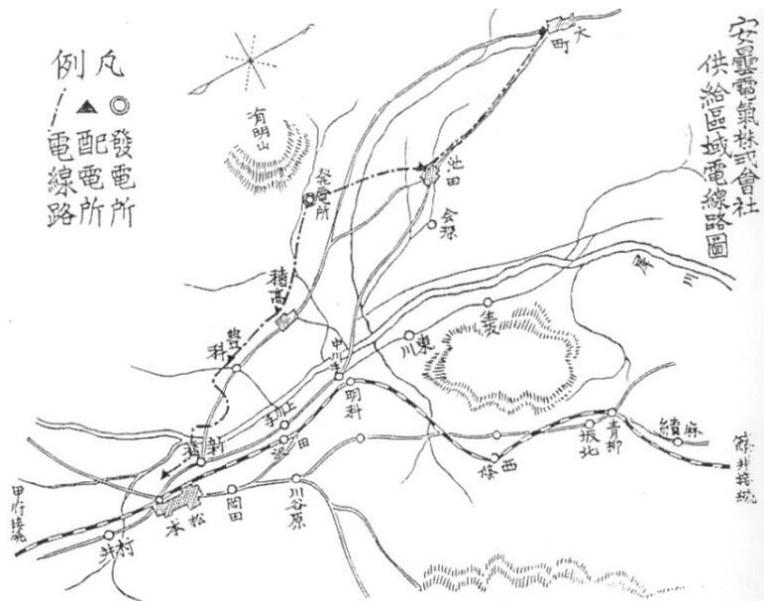


中部電力宮城第一発電所 1号発電機、励磁機<平成 16 年> 発電機 1号機、2号機<大正 3 年>
(明治 37 年当時は宮城発電所) (「安曇野に電気が灯って 100 年」より) (同左)

②宮城第一発電所からの配電

□明治 37 年宮城第一発電所が送電開始。11,000V の三相三線式特別高圧送電線を採用、大町変電所、池田変電所、東穂高変電所(穂高変電所)、豊科変電所に送電し、変電所からは 140V の低圧にして、それぞれの市街地(人口密集地)へ配電。

□電力需要開拓のため明治 41 年から大正にかけて村部へも配電。明治 45 年には中川手、東川手(以上明科)、南穂高(豊科)で、大正 2 年に有明(穂高)で、大正 3 年に高家(豊科)、明盛、温(三郷)で、大正 5 年に西穂高、北穂高(穂高)、七貴(池田・明科)、烏川、三田(堀金)で、大正 6 年に陸郷(池田・明科・生坂)で、大正 7 年に上川手(豊科・明科)、小倉(三郷)で電灯が灯っている。



安曇電気株式会社供給区域電線路線図(明治 38 年「電気之友」163 号)

□その後大正 7 年宮城第二発電所稼働開始、同 9 年宮城第三発電所稼働開始、同 14 年宮城第四発電所稼働開始、昭和 2 年宮城第五発電所稼働開始。

(2)旧鐘の鳴る丘高原寮 安曇野市有形文化財

①温泉旅館の時代

□大正 8 年(1919)、有明村名士らが長野市内にあった遊郭の 3 階建て建物(明治 38 年建築)を現在の有明高原寮の場所へ移築。中房温泉から 13km もの距離を引湯して温泉旅館「有明温泉」として営業。この時、鐘付きの時計台が付けられる(形状は今のものよりかなり凝っていた)。昭和初期まで営業したが廃業。その後 20 年近く放置。



旧鐘の鳴る丘高原寮全景



玄関とバルコニー

②松本少年学院の時代

□昭和 21 年 6 月片倉製糸が旧有明温泉の建物を買収(負債の肩代わり)し、松本市内の司法保護団体が少年保護施設「松本少年学院」を開設。3 階建ての建物を 2 階建てに改築。改築直後は時計台が無く、後年「とんがり帽子」の時計台が付けられる。旧少年法にもとづき少年審判所からの委託少年を収容。

□昭和 22 年 7 月 5 日から放送のNHKラジオ連続放送劇「鐘の鳴る丘」のモデルとなる(『北アルプスのふもとで 有明高原寮 50 年の歩み』〈平成 10 年〉による)。ドラマの原作は菊田一夫。昭和 25 年 12 月 29 日まで計 790 回放送。主題歌「とんがり帽子」は作詞:菊田一夫、作曲:古関裕而、歌:川田正子・ゆりかご会で大流行した。また昭和 23 年から公開された松竹映画「鐘の鳴る丘」(3 部作)はここをロケ地としたといわれる。

③有明高原寮の時代

□昭和 23 年 12 月、法務庁(現法務省)が松本少年学院の施設を買収し、少年院「有明高原寮」設置。翌年、男子少年を収容する初等及び中等少年院として収容を開始した。昭和 40 年代には職業訓練のための課程(自動車科ほか)を設けている。昭和 55 年 3 月施設改築。

④鐘の鳴る丘集会所の時代

□昭和 55 年、旧有明高原寮を穂高町が松尾寺公園内に移転復元。青少年健全育成施設。

(3)新屋公民館 国登録有形文化財



新屋公民館全景



正面入口脇の登録有形文化財銘板

①今では珍しい木造の大規模公民館

□有明富田の一級建築士場々 渉氏の設計。木造一部 2 階建て、天井高約 5m。延床面積 230 m²。一級建築士場々 洋介氏によれば「控え柱のある構造で屋根はトラス(洋小屋)。少ない材料で軽く、大空間をつくる工夫が見られる」(市民タイムス連載「近代化遺産を歩く」)。

②有明新屋地区の文化の殿堂(社会教育法の理念を体現)

(4)相馬家の洋館



相馬家の洋館正面(左側にある玄関は純和風)



南側から見た相馬家の洋館(和風のくぐり戸)

①建物概要

□切妻屋根の日本家屋に増築された洋館。木造平屋、瓦葺、寄棟造、建築面積約 30 m²。
正面北側には純和風の玄関がある。

②相馬愛蔵が星良(のち黒光)と結婚するために建築された建物

□「相馬の洋館というのは、愛蔵の花嫁の星良を迎えるとして、昨年(のち)の春、玄関脇に作られた小学校の教室風の応接間のことだ。」(臼井吉見『安曇野』より)

③穂高禁酒会の拠点

□「ここが穂高禁酒会の本拠となり、日曜学校が開かれ、集まる青年たちに、黒光がオルガンで讚美歌を弾き、夫婦が講義をしたということである」(『穂高町誌』歴史編下)。

4.豊科市街地 【豊科地域】

(1)旧呉羽紡績豊科工場

①豊科町長三原儀十郎の工場誘致決断

□製糸工場の没落と松本商業者により蚕食され出した豊科の商業→町衰亡の一大危機

□軍需産業より平和産業を!

□社史『呉羽紡績 30 年』(昭和 35 年)によれば「長野県南安曇郡豊科町は、かつて同地方の生糸事業の中心であった。ところが 1922 年の生糸業の不況などによって町勢がおとろえはじめた。いきおい町の当局と有力者がその復興策に心をくわけていた。たまたまちかくに大町紡績がうまれたことはこの町をおおきくうごかすことになった。/ 1936 年 4 月 24 日大町紡績が松本市でひらいた地方有力者招待会の席上で時の豊科町長三原儀十郎氏は工場建設の利益を知った。これが直接のきっかけになって当社の工場を誘致しようとする町の運動はにわかに積極的になってきた。」



事務所社屋

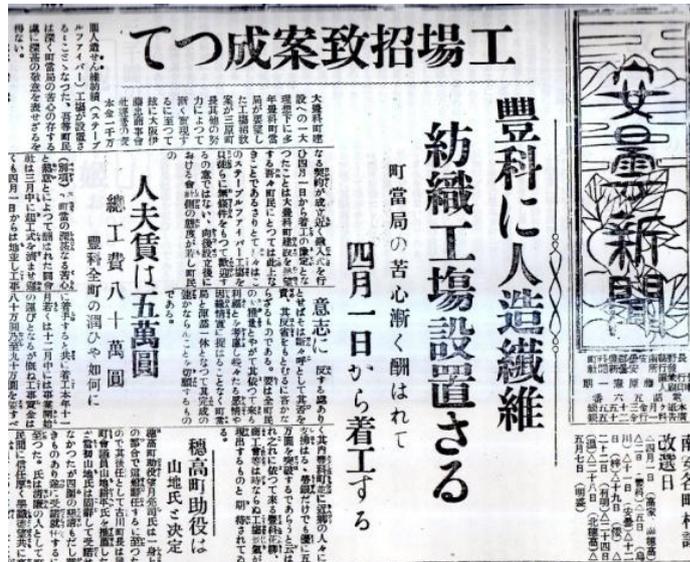


操業開始当時の面影を残す旧工場

②紡績側の条件と町による用地買収対応

□条件 a. 豊科駅西の土地約 60,000 坪(198,000 m²)無償譲渡 b. 工場建設に伴い道路や川を付け替える費用 150,000 円を町が全額負担。町は a. b とも承諾。昭和 6 年豊科中心部に上水道敷設が完了していたこと、また安曇電気株式会社が安価に豊富な電力を供給してくれることになったことも工場進出の大きな要素。土地買収は成相・新田の美田地帯 60,000 坪の買収だけに地主・自作農・小作農への説得は大変な困難を伴った。

③誘致決定を知らせる新聞記事



「安曇新聞」(昭和 12 年 3 月 18 日付)の記事「工場招致案成って」

- この「安曇新聞」は誘致成功について「全町を挙げての喜び之に過ぎるものはない。同工場設立後における豊科町の発展膨張と其将来における福祉は云ふまでもなくやがて郡下の中核小都市として商工農各般に齎す利福は蓋し少なからざるものである。(中略) 工事資金は八十万円乃至九十万円を要すべく其内豊科町並びに近郷の人々に支払はるる労銀だけでも優に五万円を突破するであらうと云われ之れに依って来る豊科花柳、商工会等は時ならぬ工場景気が現出するものと期待されてゐる」と伝える。
- 昭和 12 年 4 月着工、社史によると同年 8 月「豊科紡績の設立総会は呉羽紡績本社でひらかれたが、会社の事務所は豊科工場のなかにおいた」。昭和 14 年竣工、操業開始。
- ④戦後における呉羽紡績豊科工場の企業城下町豊科
 - 豊科町の工業都市化を牽引する最初の工場となった。昭和 20 年代から町財政に貢献。
 - 「この時期(昭和 26 年頃)南安曇郡で市町村平衡交付金の交付を受けていないのは豊科町だけである。(中略) 財政的に見て、大工場の存在が町の発展のために最も有力であるとの見解は何人も変わることなく」(『豊科町誌』近現代編 P388～P389)、昭和 28 年には豊科町工場誘致条例を施行している。

(2)豊科劇場 (旧豊科座、明治の開設時は相生座)



旧豊科劇場全景



旧豊科劇場の天井に張られた地元商店広告

①豊科劇場の発祥

- 一日市場の松ヶ枝座を豊科村成相相生町へ移転、芝居小屋「相生座」となる(明治 20 年)。

明治 45 年発行の酒井俊三『南安曇案内』には「劇場は町の中央にあり相生座といふ」。

②避難施設としても活用

□豊科大火(明治 27 年)は市街地の大部分を焼き尽くし建物 500 棟、戸数 198 戸に被害が及んだ。このとき「焼出サレタル人民は相生座ニ仮住シ、郡役所ヨリ炊出シテ救護シツツアリ」(「豊科学校沿革史」)。**大火自体は穂高消防により消し止められた。**

③花柳界に位置する娯楽の殿堂→昭和初期に現在の建物に改築したものと見られる。

④戦後の映画館としての営業

(3)旧市川歯科医院



旧市川歯科医院洋館の全景



雑誌「信濃不二」121号掲載広告に見える市川歯科医院(大正10年)

①信濃鉄道豊科駅駅前の新興八千代町に市川歯科進出

□大正モダニズムを具現した洋風建築

寄せ棟造、木造 2 階建て、瓦葺き。ファサードに見られる装飾技巧。

□大正初期まで豊科の町に無かった歯科医などについて、地元ジャーナリスト会田血涙(穂高有明出身)は「豊科町に水道を敷設すべし」(大正 9 年『信濃不二』第 117 号)で大正 9 年の状況を「町※1となり、汽車※2も、電話※3も、公会堂※4も、倉庫※5も乃至、写真は一軒だが産婆も**歯科医もたくさんに出来**自転車屋の如きは数十軒に達したのである」と述べる。

(註)※1 豊科村が大正 4 年町制を施行し豊科町となる。 ※2 信濃鉄道豊科駅開業は大正 4 年 1 月のことで当時は蒸気機関車が走っていた。 ※3 大正 3 年 9 月、豊科に市内特設電話が開通、12 月から電話交換事務が始まる。 ※4 大正 8 年、豊科出身の丸山盛一(神戸在住)の多額の寄付により南安曇郡役所の西隣に公会堂が建てられた。 ※5 大正元年に豊科町新田の西裏に建てられた豊科冷蔵庫(天然氷を利用して蚕種を貯蔵する倉庫)を指す。

(4)法蔵寺庫裏 国登録有形文化財

①古刹法蔵寺のあらまし

□永正年中、吉野郷の丸山丹後守が松本平瀬養老坂上(寺坂)にあった法蔵寺を吉野梶海渡へ寺籍復活したと言う。慶長 16 年(1611)、松本藩主石川康長の重臣青山出羽、郷士丸山丹後守、岡村小兵衛により成相新田宿の旦那寺として現在地に移建。六寮舎(坊)あり。



庫裏全景



庫裏内上部の梁(移築以前からの巨木材を使用)

②明治初年の松本平に吹き荒れた廃仏毀釈の嵐

□明治初年最後の松本藩主戸田光則による廃仏毀釈断行→領内 140 ケ寺廃寺、施設破却。

③容易でなかった再興と庫裏移築・整備

□庫裏は元々堀金岩原の安楽寺のもので、廃仏毀釈により穂高の小川家が明治 4 年解体移築し穂高で社屋としていた。明治 34 年ころ(現住職の話によると明治 38 年)穂高から移築。現在見る庫裏の内部にまで整備を完了させたのは明治 45 年とされる。住職の居宅も兼ねる庫裏の整備を優先したが、これ自体、相当難航していたことが分かる。

□仮の本堂は明治 11 年に建てられたが、その後の勧進がうまくいかず、きちんとした本堂が完成したのは、戦後の昭和 35 年のことである。「檀家 1000 軒」(元禄年間には早くも 600 軒)を謳われた法蔵寺であっても、戦後の高度成長期以前には普通の檀家では食べるのに精一杯で、容易に本堂建設の寄付金を募りきれなかったことが分かる。

5. 豊科市街地の郊外 【豊科地域】

(1) 旧田沢橋

①田沢の渡しから仮設の橋設置へ →明治 35 年篠ノ井線田沢駅開業に伴い田沢駅と豊科中心部を結ぶ**田沢街道**(大正前期には既に県道、新田に道路元標があった)が開通となり明治 37 年木桁の板橋を架ける。同 40 年架け替え。当時困難とされた田沢街道の開通と田沢橋(木橋)の架橋は南安曇郡会議長**小穴五郎**(1855～1918)の尽力の賜物である。



犀川左岸(西)側から見た田沢橋



新田沢橋と旧田沢橋(犀川右岸側から臨む)

②永久橋としての田沢橋設置→洪水による橋の流失が度重なるため、昭和 30 年に遂に鉄

筋コンクリート製の永久橋を建設。ローゼ桁 8 連、ゲルバー桁 5 連、長さ 361m、幅員 4.5 m。豊科町部から最短で川手筋の幹線国道 19 号に到達するために重要な橋であった。

③新田沢橋設置と旧田沢橋の役割変更→昭和 55 年豊科インター田沢寺所線(現豊科インター堀金線)開設に伴い新田沢橋が架けられ、旧田沢橋は歩行者専用の橋となった。

(2)拾ヶ堰サイフォン(旧)

①拾ヶ堰概要

□文化 13 年(1816)開削。全長:約 15km(この距離は西原橋手前から富田新田に至る分流の距離含む)。取水口:下平瀬、終末放流地点:穂高自動車教習所東北の地点で烏川に落とす。灌漑面積:約 1,000ha。近世安曇野における最大級の横堰ではほぼ 570m の等高線に沿って流れるが、梓川を横断する所が大正 8 年まで通水上で特に問題を抱えた箇所である。



梓川を横断してきたサイフォンの出口



サイフォン出口から西流する拾ヶ堰を望む

(平成 7 年～10 年の工事で新サイフォン設置)

明治初年における拾ヶ堰の管理実態が分かる松沢求策「晴雨諸件日誌」(明治 8 年)には「七月十九日…拾ヶ堰横掘之由聞テ直ニ飯田ニ至、横掘人足ヲ指揮ス…」とか「九月二十五日…梓川横掘人足千四百余ヲ拾ヶ各耕地ヨリ募、普請ス…」とかの梓川横断箇所普請の記載が頻出する。

②梓川横断箇所へのサイフォン設置(豊科町教育委員会編『命の水』参照)

□大正 5 年(1916)に関係者から県へサイフォン式梓川伏越工事要望の陳情がなされる。

□大正 7 年(1918)12 月、長野県議会でこの伏越工事費の 5 割補助が議決される。

□大正 8 年 9 月、十か堰普通水利組合管理村長(烏川村長)黒岩重義(1877～1957)は問題多い拾ヶ堰梓川横断箇所の通水を完璧にすべく決断しサイフォン式伏越工事に着手。

□大正 9 年 5 月、工事完成、通水に成功し 1,000ha もの灌漑が可能となった。

□黒岩重義の偉業は取水口近くに建つ「十箇堰記念碑」に「大正八九両年ノ交烏川村長黒岩重義伏越工事ヲ完成シ水利益大ナリ」と刻まれている。また烏川村(現安曇野市堀金烏川)上堀出身の工学博士・京大名誉教授の青柳栄司(1873～1944)が黒岩村長に協力しサイフォン工事設計に尽力したことも忘れてはならない。

③平成 7 年～10 年の新サイフォン設置工事

□サイフォン出口近くにある記念碑(平成 10 年 4 月)によると平成 7 年 10 月着工、平成 10 年 3 月完成。総工費 17 億円。旧サイフォン直下 10m のところに直径 2.8m、延長 400m の新サイフォンを敷設する。旧サイフォンは 78 年を経過し経年劣化が来ていた。

(3)飯田家住宅 国登録有形文化財



左手前から物置一、米蔵、醸蔵、
奥に醸造蔵一が配置されている



醸造蔵 二



中央やや左に文庫蔵・隠居屋、
一番右に醸造蔵一が見える

①国登録有形文化財登録により新たな文化財活用之道を实践

□民間業者の「蔵久」営業と文化財紹介という相乗効果

□有形文化財登録された建物と建築年

- a. 主屋 江戸後期/明治後期増築 b. 文庫蔵・隠居屋 明治8年(1875)/明治初期増設 c. 質蔵 明治前期 d. 味噌蔵 明治期 e. 作業小屋 明治後期 f. 醸蔵 大正3年(1914) g. 米蔵 安政6年(1859)/明治33年(1900)増築 h. 醸造蔵一 明治後期/昭和初期増築 i. 醸造蔵二 明治後期 j. 物置一 明治前期後期 k. 物置二 昭和前期 l. 門番所 明治後期 m. 内門 明治後期 n. 塀 明治後期

②飯野屋の屋号で清酒醸造

□大正13年の概況(参考資料:『南安曇郡誌』第三卷上) 商号屋号=飯野屋、製造場位置=高家村飯田、製造者氏名=飯田慶司、酒の銘柄=笹の露、清酒量=672石。銘柄は戦後になって**好み笹**の名に変わる。

□昭和36年(1961)飯野屋(豊科町)は「亀波」の亀屋酒造店(梓川村)、「蔦泉」の務台酒造(三郷村)と合併し**酔園銘醸株式会社**を設立。同社は清酒「酔園」で知られた。現在はEH酒造が清酒「酔園」を継承。

(4)旧信濃教育会館 国登録有形文化財



旧信濃教育会館(現・信濃教育会生涯学習センター)



西田幾多郎哲学詞碑(市有形文化財)

①旧信濃教育会館の建物の解体

□「広報とよしな」第302号(平成2年6月20日発行)掲載の記事「信濃教育会の旧本館 移築工事を終えて7月1日オープン」は「昭和四年から半世紀にわたって使用され、文化的

価値が高いことから、取り壊しを免れた信濃教育会の旧本館、長野市から旧高家小学校跡地への移築<復元>工事が終わって北欧風の外観を表しました。/ 7月1日のオープン後は信濃教育会の<長野県生涯学習センター>として生まれ変わり、地元へも無料で開放されます。/ 建物は、木造モルタル2階建、面積は約120坪で、中には10の部屋があります。昭和4年当時の建築費は、約10万1千円でしたが、復元・移築の総工費は約2億円ということです」と伝える。当時の**信濃教育会長太田美明**は建物の解体撤去を惜しむ多くの声を受け、建物を**教職員の研修の場や地域住民の理想的な生涯学習の場**として再活用することを考えた。移転先は豊科へと当時の豊科町長が申し出た。

②哲学的風土の色濃い安曇野の環境

□安曇野に哲学的風土という素地があるから旧信濃教育会館の高家小学校跡地への移築も理にかなう。実は戦前信濃教育会の中に**西田幾多郎**の教えを直接受ける**信濃哲学会**があった(大正9年創立)が、安曇野市三郷出身の哲学者**務台理作**(京都学派にして西田幾多郎門下)が信濃教育会と西田幾多郎とをとりもつことで、哲学会が成ったといわれる。信濃哲学会に倣い各郡市の教育会でも哲学会がつくられ、南安曇郡でも西田一門の指導を仰ぐため**南安曇哲学会**が創立される(昭和13年)。また高家村(現安曇野市高家)では紀元2600年記念事業に教育尊重の村風から人の心を清めるような文句の碑ということで**西田幾多郎詞碑**を高家小学校に建てた。碑文の揮毫は南安曇哲学会の先達でもあった藤澤利男校長が親交のあった高山岩男京大教授(西田門下)を通じて西田幾多郎に依頼。このことから藤澤校長の見識の高さが窺える。さらに、戦前から信濃教育会の講演の招きにより信州と関係を深めていた教育哲学者**木村素衛**(西田幾多郎門下)は**温明小学校(国民学校)当時の太田美明(南安曇郡梓川村出身。のちに信濃教育会長)**と既に交流があったが、戦後まもなくの昭和21年1月**南安曇教育会**の招きで**温明小学校**で講演している。その前日、梓川村の太田美明宅に宿泊。木村の学恩に感謝した同教育会では、没後23年を経て昭和44年南安曇教育会館敷地に**木村素衛詞碑**を建てている。その詞碑には木村がこよなく愛した安曇野への深い想いが込められている(張さつき『父・木村素衛からの贈りもの』)。このように安曇野は西田幾多郎及び西田門下(務台理作、木村素衛)と浅からぬ縁で結ばれている。**市内では務台理作の作詞を校歌としている所が数校ある。**

6.堀金中心部(上堀役場周辺、三田学校町)の郊外【堀金地域】

(1)日輪舎 国登録有形文化財



日輪舎全景



日輪舎内部(2階)

①南安曇農学校のあらましと第二農場設置

□南安曇農学校(現南安曇農業高等学校)は大正9年(1920)4月15日、豊科町新田の旧南安曇郡庁舎(場所は今の豊科病院のところ)を仮校舎として開校。初代校長は関谷吾一。大正10年7月17日、新校舎が現在の南安曇農業高等学校の場所(豊科町成相)に完成。大正11年4月1日、実習地を借り入れる。徐々に農学校としての体制を整えていく。

□「**食糧の増産と農民の錬成**の声のもとに、昭和八年～昭和十三年までの五年間を費して、堀金村倉田地籍の通称<次郎作>原の開墾が行なわれ、七haの林地が畑地化された。この開墾一丁で掘起し、もっこで石を積み上げた。/**この農場は園芸部門を中心とした第二農場として、米と養蚕主体の地域農業に多大の影響を与え、以後の農業教育の中で大きなウエイトを占めることになった。**」(創立50周年記念誌『南農 五十年の歩み』)

②第二農場に建設された日輪舎(昭和20年)

□登録有形文化財「日輪舎」説明板による説明

「この建物は、昭和20年5月に完成した。/**昭和初期の日本は満蒙開拓熱が盛んで、とりわけ<満蒙開拓青少年義勇軍>は国策として<いけ、満洲へ>の合言葉とともに若者の気持ちをかきたてていた。/この義勇軍に志願すると、茨城県内原にある訓練所(加藤完治所長)でおよそ半年間、渡満(満州へ渡る)するための厳しい訓練が行われた。その内原訓練所の宿舎が円形の建物<日輪舎>であった。/この宿舎は、満州現地住民の住居<包(パオ)>を模して建てられたもので、<日輪>とは太陽を意味し、縁起もよいとされた。/本校<日輪舎>は、こうした時代背景のもとで、**第二農場(約六畝)の中央に内原訓練所に習って造られた。**ここは、南農で学んだ先輩たちが、**文字どおり一丁でクヌギ林を切り開き開墾したところであり、この地こそが生徒の宿泊学習所にふさわしい**として選定され、当時の有明村の篤志家からも浄財が寄せられ、豊科町の宮大工小見田直一氏により建造された。/当時の生徒たちは、犀川の川原から自転車の荷台で石を運ぶなどして、この<日輪舎>の建設に携わった。/当時の南農を記念する建物である。/(中略)【建物の概要】直径13.3m・36角形、鉄板葺<原型 板葺>の円錐形屋根、総二階建(以下略)」(文:橋渡良知)**

③日輪舎を満蒙開拓義勇軍関連の施設ととらえていいか

□創立50周年記念誌『南農 五十年の歩み』(昭和46年)には日輪舎の記述が随所にあるが「日輪兵舎」という表現は皆無。「広くて筒抜けで間に壁のない土間の建物」という建物構造を表す「廠(しょう)」の字を用いた「日輪廠舎」なら出てくる。第三代校長横川十二は「**食糧増産のために烏川の第二農場の活用を考え、日輪舎を建てて、学校と農業者の連絡を密にしました**」(『南農 五十年の歩み』)と述べる。満蒙開拓義勇軍の養成に係る施設でないことが分かる。記念誌本文P178～P179にはさらに日輪舎の具体的な記述が載る。それによれば「十八年一月、総合農場(第二農場を改称)内に**生徒宿泊施設**が起工され同年八月十五日基礎工事完了。しかし、太平洋戦争中のこととて工事が遅れ、二〇年五月ようやく完成、落成式が挙行された。(中略) 生徒宿泊所は当時修練道場とも呼ばれ地元の希望者にも開放するという目的も持っていた。戦後まもなくの二十二年の学校要覧には次のように記載される。<…かつて全国的に流行したいわゆる日輪廠舎であるが、本校総合農場のものは内原式の粗末なものとは異り、材料施工とも入念にできている。これは 南安有明出身の丸山勝氏の篤志寄付を主とし本校同窓会員の協力を得て総工費約三万円を投じて昭和十八年一月着工、二〇年五月竣工した。宿泊施設としてはまだ充分

に利用されていないが、将来これが**総合農場経営の中心として重大な役割**をはたすであろうことは確かである。(以下略)」

7.三郷中心部(一日市場の町並)の郊外【三郷地域】

(1)務台酒造の蔵



務台酒造正面



務台酒造全景

①野沢の歴史的景観を形成する建物

□文化庁文化財部『中央日本塩の道地域連携整備計画調査 文化調査報告書・別冊 歴史的町並み・集落等の調査(分布調査)編』(平成13年)の「長野県三郷村野沢」によれば「集落の中央に津島社があり、集落の北寄りに瑠璃光寺がある。津島社の境内には弘化3年(1846)再建の本殿のほか、農村舞台風の拝殿(明治20年再建)などがある。瑠璃光寺は浄土宗の寺院で、本堂は近年の再建であるが、茅葺の鐘楼門などに歴史的な景観が保持されている。そのほか、**津島社と瑠璃光寺の中間地点には務台酒造の酒蔵や主屋などの伝統的建造物群が美しい景観を作っている。**」野沢地区の伝統的建造物は大規模な本棟造と土蔵であるが、総二階の蚕室造とっていい建物やレンガ蔵にも特徴を見せ、それらは近代建築といて務台酒造の建物群とコントラストをなして歴史的景観を構成する。

②務台酒造

□大正13年の概況(参考資料:『南安曇郡誌』第三卷上) 商号屋号=務台店、製造場位置=温村野沢、製造者氏名=務台九栄次、酒の銘柄=蔦正宗、清酒量=759石。銘柄は戦後になって**蔦泉**の名に変わる。

□昭和36年(1961) 務台酒造(三郷村)は「好み笹」の飯野屋(豊科町)、「亀波」の亀屋酒造店(梓川村)と合併し**酔園銘醸株式会社**を設立。

IV近代化遺産を未来のためにどう活かすか(地域の活性化に向けて)【結論】

- ◎歴史的町並整備、歴史的景観の保持 →「その地域にしかない歴史との対話」を魅力的要素に観光資源として活用すれば観光客の増加につながるだけでなく、生涯学習的にも効果(生涯学習観光促進、地域史教材)→歴史ガイド(市民学芸員)養成→地域振興と活性化。
- ◎「歴史遺産(建造物だけでなく歴史資料や民俗文化財などを含む)をまちづくり資産として生かしていくことは、20世紀に陥った画一的なまちづくりの弊害から脱却して、个性的で地域性を反映した21世紀型のまちづくりの方向性を示唆している」(伊東孝『日本の近代化遺産』)